

スタジオジブリの脱原発論と

宮崎駿の脱イデオロギー論

中場 愛

はじめに

東日本大震災後の2011年6月11日、宮崎駿は「No! 原発」というプラカードを下げ会社周辺で小さなデモを行った(右の『熱風』表紙参照)。その後の16日にはジブリの屋上に「スタジオジブリは原発ぬきの電気で映画をつくりたい」と書かれた横断幕を掲げた。スタジオジブリとしての態度表明をこの文に託したのだ。この記事を読んだとき私は「宮崎は反原発の思想を抱いているのだな。」と感じた。しかし震災後の宮崎のインタビューを見ていくうちに、必ずしもこうしたメッセージには宮崎の姿が一致しないことがわかった。この二面性の原因は何なのだろうか。また宮崎の本心はどのようなものなのだろうか。

本小論では、雑誌のインタビュー記事などにより宮崎の二面性の理由を検討したうえで、彼の本心が作品にどのように表れているか自分なりに考察してみたい。

宮崎駿と鈴木敏夫 —インタビュー記事から

まずは先程触れた横断幕について宮崎はこのように語っている。

あの横断幕は自分たちにとって本当に正直なスローガンを作ろうとしたものです。自分の身近な人間と話していると、「反原発」という言葉自体がイデオロギーみたいになる。僕は原発をなくすことにはもちろん賛成ですけれど、「反原発」とか「いやいや必要だよ」みたいな話に巻き込まれるのは嫌だから。鈴木さんは学園紛争世代だから「阻止せよ」とかね、そういう言い方を喜ぶけど、そういうのはもうどこか



「熱風」第9巻第8号
「No! 原発」デモの様子が表紙になっている。

でイヤなんです (笑)。¹⁾

宮崎は『反原発』というイデオロギーが嫌だ」と語るが、これは「No！原発」というプラカードを掲げてデモをしたり、横断幕を掲げたりといった行動とは矛盾している気がする。宮崎の本心はどちらであるのだろうか。

ところでこの話に出てくる「鈴木さん」とは、スタジオジブリのプロデューサーである鈴木敏夫のことである。彼は1989年にスタジオジブリへ移籍して以降、スタジオジブリ全作品の映画プロデューサーを務めており、スタジオジブリは宮崎駿とこの鈴木敏夫をなくしては語れないといわれている。それほどスタジオジブリという会社に影響力のある人物なのだ。彼はスタジオジブリの機関誌『熱風』(2011年8月号)の中で次のように語っている。

実はあの震災の半年くらい前、(中略)福島原発の施設内にいろんなお店が入っていて、その中になんとトトロのお店があったんです。僕はそれを知った途端、もはやそのお店をつづけることはまかりならん、撤去せよといったんです。その時期それをめぐって、ジブリの中でもいろんな意見が出てきたんですよ。簡単にいえば、80%の人が原発を安全だと言ってるのに、なぜ鈴木さんはそういう態度をとるのかと。僕はそのとき、かなり感情的な言い方でね、会社として原発に反対だよ。²⁾

そもそも僕はまだアニメーション雑誌の編集長をやっていた1988年に、「風が吹くとき」に絡めて原発が怖いという特集(『アニメージュ』1988年8月号)を組んだことがあるんです。日本全国に原発が何基あって、それがどういうものなのかを大特集しましてね。³⁾

僕はそういう経緯があるから、いつの間に多くの人間が原発を安全だと思ふような世の中になっていったのか、まったくわけがわからなかった。⁴⁾

このように鈴木は宮崎と違って、震災前からかなり強く反原発思想を示していたことが読み取れる。

こうしてみるとスタジオジブリという会社自体は「原発に反対」という考えを示してはいるものの、その中には「反原発」という気持ちは持つものの、それを1つのイデオロギーとして打ち出すことを嫌う宮崎駿という人間と、はっきりと「反原発」思想を打ち出す鈴木敏夫という少し考

え方の違う二人がいるように感じられる。「原発」はよくないという考えは二人とも同じなのだがそこには微妙な差異があるようだ。「反原発」のイデオロギーを嫌う宮崎が始めに述べたような「反原発」を示す行動にでたのは、鈴木の影響もあると考えることもできるようだ。

では宮崎の真意はどこにあるのだろうか。それを作品の中に探つてゆく。彼は自らの作品にどのような思いを込めているのだろうか。

宮崎の思い ―アニメ作品から

ここでは彼の主要な作品を挙げ分析してみたい。以下に自分なりに感じた重要なポイントをいくつか挙げてみたいと思う。

(1) 『風の谷のナウシカ』と『天空の城ラピュタ』

まずは簡単な説明を加えたい。風の谷という名の通り、谷の人々は風車を使って風のエネルギーで生活していた。またナウシカはガンシップ(かつて栄えた文明によって作られた、おそらく小型の内燃機関らしきものによって飛ぶジェット戦闘機のような乗り物)には乗らず、風のエネルギーで飛ぶ小型グライダー「メーヴェ」に乗る。強力な破壊力、機動力(エンジン)をもつガンシップに対して「私はメーヴェのほうが好き、ガンシップは風を切り裂くけど、メーヴェは風に乗るんだもの・・・。」と語る。これはいまで言う風力エネルギーにあたるのだろうか。

ところでこの作品については、以下のような議論がある。

物語の大テーマは(中略)自然=腐海とそこに棲む動植物と人間がどのように共生すべきかという大問題である。彼女(ナウシカ)は、人間が環境と生態系の一因子と知るがゆえに、生命操作や戦争に展望を見い出す傲慢で近視的な人間を戒め、しかし絶望して森に逃避することなく、森と人間の間立ち、悩み苦しみながら共生の道を模索する。以降、繰り返される自然と人間をめぐる深刻なモチーフはここに端を発している⁵⁾

ここで述べられているように、この作品では王蟲(「自然」の象徴)、と巨神兵(「文明」の象徴)の対立が描き出されている。最後のシーンでは風の谷の味方であるはずの王蟲(自然)が風の谷を襲うのだが、それを巨神兵(文明)が食い止める。(最終的には「自然」の勝利という形に終わるのだが・・・)

ここで宮崎は、「文明」は危険であるが時には必要なものであり、「自然」

は人間にとって必ずしも都合のいいものではない、そんなメッセージを語っている気がする。これは例えば、「原発」のエネルギーが危険だからといって「自然」のエネルギー（風力、太陽光、地熱、波など）を代わりに使えばいい、などという問題ではないのだ。あらゆる自然は我々がコントロールできるほど生易しくはなく、また文明も常に悪ではない。自然が善で文明が悪というような単純な二項対立にはなっていないのだ。

ジブリの作品でこの『風の谷のナウシカ』とよく似た世界観とテーマを扱った作品が『天空の城ラピュタ』である。そこには最新鋭の科学技術とまるで中世の封建時代のヨーロッパ社会の融合した世界のなかで、「原発」を連想させる「失われたエネルギー」を巡る「イデオロギーの対立」が描かれている。そこでの最も象徴的なシーンが、主人公であるシータたちがラピュタに到着したときのシーンである。「そこにはもうロボットは一体しかいないのです。パズーは言います。『科学もずっと進んでいたのにどうして・・・』超近代科学技術を有したラピュタがなぜ滅んでしまったのか。。。』⁶⁾この謎が物語全体の伏線となっており、「ラピュタにただ一人残っていたロボットの肩にはコケが生え、小鳥がとまっています。さらに大樹の縁には壊れたロボットが無数に転がっています。その壊れたロボットは自然と同化しています。ロボット＝近代文明と自然とが調和しています。」⁷⁾と語られるようなシーンがあるが、これについては叶が

物語の後、主人公の少年と少女は、時代の暗転に抗して、自然と共生するつつまじやかな生活を守っていこうとするであろう。それは、世界を刷新するマクロ的革命思想でなく、節度と礼節あるミクロ的な人間の暮らしへの賛辞である。⁸⁾

というように、文明と自然とは共生可能で、必ずしも二項対立的関係ではないというメッセージが読み取れる。

(2) 『もののけ姫』と『となりのトトロ』

『もののけ姫』にでてくる「たたら場」は、製鉄場が舞台となっている。ここでは、製鉄のためのエネルギーを獲得するために、大規模な森林破壊を行っており、自然の復元力との戦いが描かれている。古代、中世において「製鉄」は膨大なエネルギーを消費するもので、そのエネルギーの源として大量の生木や炭が使われ、世界各地で森林が破壊され文明が減んでいったとされるのだ。

『もののけ姫』では自然の恐ろしさというものが顕著に描かれている。

最初の森（シシ神様が守っていたころの森）は人を寄せ付けないおどろおどろしい雰囲気を漂わせていた。しかしシシ神様が死んだあとの森は、最初の頃の恐ろしさなどみじんもない、人間にやさしい、明らかに人工的な森に変わっていた。それを目の当たりにしたとき、サン（もののけ姫）は「シシ神様は死んでしまった。」と語り、それに対してアシタカは「シシ神は死なない。生と死そのものだから。」と語る。

これは森との共存＝資源のサイクルを自覚した人間たちが、自覚的な環境保全を行ったことを意味しているのではないか。ただ暗い闇を含んだ原生林（シシ神）は一度征服（斬首）され、隅々にまで文明の光があらわれてしまったために、神々の威光は失われてしまった。⁹⁾

こう述べられているように、サンの言葉は、「自然と人間は『共存』することはできない、どちらかを立てるともう一方は崩れてしまう、両方とも立てることなどできないのだ。」ということの意味している気がする。

一方アシタカの言葉は、「一度実体を殺してしまった神を、自らの心に再生できなければ、再び森は壊滅してしまうだろう。その時、自然は凶暴化し、資源も枯渇して人心も荒れすさび、文明は滅びてしまうのである。」¹⁰⁾ というように、シシ神への畏怖（つまり森との共存）は人間の生死に直結しているということをしめしている。自然と真剣に共生するという観点と、人間の欲望をコントロールすることが重要であるということ在意図しているのではなかろうか。

この『もののけ姫』のテーマを、ちょうど裏側から表現するような作品が『となりのトトロ』である。

『となりのトトロ』は、日本を舞台として、自然を象徴する精霊的な動物と子どもとの出会いと冒険を綴った作品であった。この作品は、煩わしい人間関係の回復や、兵器争奪などの大装置を一切取り払ったシンプルなファンタジーである。つまり、温めてきたテーマである『自然と人間のつき合い』にしぼり込んだ作品と思われる¹¹⁾

時代は現代だが、『もののけ姫』では人類に敵意を抱いていた自然の精霊達がなぜか人々に好意的である世界が描かれている。そこでは人がすむ場所として、水田や森に囲まれた少しレトロな家々が描き出されている。洗濯や掃除をするにしても、洗濯機や掃除機はないので、すべて井戸から水を汲んでこななければならない。お風呂を沸かすにも、今ではボタン一つ

でお湯を沸かすことができるが、この作品の中ではいわゆる五右衛門風呂であり、薪を拾ってきて風呂焚きをしなければならない。人工的なエネルギーではなく、まさに自然のエネルギーで生活している。これが宮崎の理想の世界ではないだろうか。

おわりに

現代は「脱原発」といったような言葉がすぐにイデオロギー化してしまう時代である。鈴木同様、宮崎も必ずしも「原発はよくない」とは思っているだろう。しかし鈴木がインタビューなどで語ったような強いイデオロギー（反原発！など）は好まない。もちろん裏方の鈴木と違って、ジブリの顔である宮崎が「反原発」と言わないことは、会社としては一貫性を欠くかもしれない、そのような背景もあって、宮崎は「No！原発」というプラカードを掲げてデモをしたり、横断幕を掲げたりといった行動をとったのかもしれない。

しかしひとたび彼の作品に目を向けるとそこからは一貫して、自然を破壊し利用しようとする（してきた）人間がどのように自然と共存して生きていくべきか、といったメッセージがよみとれる。それは、なにもすべての文明を排除せよ、という事を意味しているのではない。宮崎は決して「反科学主義者」ではなく、彼の作品には、手塚治虫の作品（『鉄腕アトム』など）に登場するような「健全でポジティブな」科学技術が、宮崎特有の「自然と魔法」と何の違和感もなく融合した、不思議な世界（『ハウルの動く城』など）が創造されている。一方的に科学の進歩を否定せず、「反原発」などの「イデオロギー」に安易に走らない姿勢が、これらの作品の中にはしっかり表現されていて、ここに彼の本心があるような気がする。

たしかにマスコミの寵児となってしまった宮崎は何を言っても何らかのレッテルを貼られてしまうかもしれない。「No！原発」のプラカードを掲げてデモを行った宮崎駿などの記事を見れば、誰もが（私を含めて）「彼は反原発思想の持ち主だ」と思うのではなかろうか。しかし彼の作品をよく見てみると、そのようなメディアの記事は表面的なメッセージでしかないということがわかる。彼は、自分の思いを、メディアを通じてではなく彼自身の作品の中に表現するのだろう。彼は本当の意味での物語作家なのである。

注

- 1) 「スタジオジブリは原発抜きで電気で映画をつくりたい」『熱風』9巻

第8号 2011. 8. 10, p4

2)前掲『熱風』p5、なお、この点は本書稲垣論文にも言及されている。

3)前掲『熱風』p6

4)前掲『熱風』p6

5)叶 精二「『風の谷のナウシカ』から『もののけ姫』へー宮崎駿とスタジオジブリの13年ー」初出は『別冊宝島/アニメの見方が変わる本』1997 宝島社。引用は

<http://www.yk.rim.or.jp/~rst/rabo/miyazaki/ghibli13nen.html> より。

6)「天空の城ラピュタが教えてくれるもの～anastrophe、崩壊へ」ブログ『早稲田大学雄弁会』より

<http://d.hatena.ne.jp/yu-benkai/touch/20100718/p1>

7)前掲「天空の城ラピュタが教えてくれるもの」

8)叶前掲論文

9)『「もののけ姫」を読み解く』コミックボックスジュニア 1997. 8, p169

10)前掲『「もののけ姫」を読み解く』p169

11)叶前掲論文

私がこの文章を書くにあたって一番苦労したのが資料集めである。その資料の中でも最もよく利用したのがスタジオジブリの機関誌「熱風」である。この雑誌は学校の図書館にも市内の図書館にもなく、CiNiiで調べて文献複写依頼で文献を取り寄せていた。このように遠くの図書館にしかなくても学校の図書館経由でいくらかでも取り寄せることができるのだが、先生に「現物を見るのが大事だ」とのアドバイスを受けて、国会図書館（関西館）に行き実物を見ることにした。実物の本を手にとってみると、目次や自分の注目していなかったページに手がかりがあったり、表紙などにはこの本で一番言いたいことが見出しとして大きく書かれていたりして、思わぬところにヒントがあった。現物を目にし、手に取ることの大切さを学ぶことができた。

国会図書館はかなり遠くて、なかなか不便な場所にあった。再び行くとなるとちょっと気が引けてしまうほど……。しかし図書館自体はとても広く、地下が書庫になっているのが感動した！本が痛まないように温度や湿度を一定に保っていて防災対策もバッチリだった。

ただ、あまりに調べものに集中しすぎて食堂の時間を確認しておかないと、昼ごはんを食べ損ねてしまうのでご注意を…（笑）

中場愛